

【2 諫早市 Isahaya City】



白木峰高原から(有明海越しに)

諫早市では、市の南東側に広がる有明海や南西側に広がる橘湾の沿岸部、諫早市街地、北東側の琴ノ尾岳、北側の多良岳など、市内各地から海越しに“[西面～北西面の雲仙岳](#)”が眺望できます。特に、多良岳南麓の白木峰高原からは、有明海の奥にそびえ立つ雲仙岳のパノラマが眺められ、この角度からは雲仙岳を構成する山々の大半が視認できます(↑)。市内の小中学校の校歌には雲仙岳が登場し、地域で古くから親しまれてきたことが分かります。また、多良岳(白木峰高原を含む)からは阿蘇山も眺望できることがあり、[阿蘇山と雲仙岳](#)の間の歴史的な大三角形(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることが可能です。

雲仙岳は、もともと海底火山が約 50 万年前に噴火活動を開始して火山島を形成し、約 40 万年に諫早の陸地とつながって半島になったとされています。そのため、諫早は雲仙岳への唯一の陸上窓口とも言え、古代より街道が通っていました。雲仙岳の山岳宗教は、701 年に僧・行基によって開かれたとされますが、満明寺と共に中核となっていた温泉神社の主要四分社のひとつは諫早に置かれ(ほか三分社は島原半島内)、現在でも“諫早神社”として存続しています。

島原半島には、雲仙岳の化身とされる巨人“みそ五郎”の伝説があちこちに伝わっていますが、実は市内の森山町には「みそ五郎どん石」という巨石があり、みそ五郎が手で割った石との伝説があります。かつて諫早湾に浮かんでいた三ツ島(大島・中の島・沖ノ島、現在では沖ノ島のみ残存)も、みそ五郎が森山町にある山(獅子喰岳)の山頂を蹴った際にできたと伝えられています。

幕末の頃、佐賀藩(諫早領)の儒学者であった福田渭水は、諫早に雲仙岳が眺望できる書齋(通称:天香書屋)を設け、幕末の志士や文化人を招いては雲仙岳を共に鑑賞し、漢詩に歌いました。また、勝海舟・坂本龍馬の一行が江戸から長崎に出張した際には、瀬戸内海から大分に上陸して豊後街道を通り、熊本から有明海を渡って雲仙岳山麓の街道を通り、諫早を通過して長崎に到達したとされています。この大分から長崎に至る別ルートとして、現在では国道 57 号線が通っていますが、この国道は、もともと阿蘇くじゅう国立公園と雲仙天草国立公園をつなぐルートとして、別府観光の父・油屋熊八氏が提案した九州横断道路(別府市～くじゅう～阿蘇カルデラ～熊本市～雲仙～長崎市)の一部となっています。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、諫早市内を旅してみませんか？

●諫早市の観光情報はこちら↓

諫早観光物産コンベンション協会 <http://www.isahaya-kankou.com/>



唐比(からこ)のハス園から



江の浦町の丘から(橘湾越しに)